

シンポジウム

「古代の東アジアとひろしまー白村江の戦いと寺町廃寺ー」

《コーディネーター》

広島大学大学院教授 古瀬 清秀さん

《パネラー》

岡山理科大学大学院教授 亀田 修一さん

比治山大学名誉教授 松下 正司さん

広島県教育事業団埋蔵文化財調査室長 伊藤 実さん

(司会) 沢元 保夫さん

沢元 それではただ今から、シンポジウム「古代の東アジアとひろしま」を始めます。

コーディネーターは、広島大学大学院教授の古瀬清秀さんをお願いしています。

古瀬さんは、東アジアにおける古代の鉄器文化について、技術史の視点から解明し、東アジアの鉄文化を体系的に研究されておられます。朝鮮半島の鉄生産についても造詣が深く、松下さんや亀田さんとの共通した技術論の話も引き出していただけると期待をいたしております。それではよろしくお願いいたします。

古瀬 ただいまご紹介いただきました古瀬でございます。

去年もちょうどこのころ、この場に座らせていただいて、お話をさせていただいたのではないかと思います。時間がたつのは随分早いものだなあと感じております。



コーディネーターの古瀬清秀さん

今年は、渡来人、渡来系の遺物から見た広島の古代ということで、特に、時代を白村江（はくそんこう）の戦い、西暦663年というあたりに絞ったお話を、と埋蔵文化財調査室でお考えになったので、そのあたりに絞って、これから議論させていただこうと思います。

最初に伊藤さんから、渡来系遺物とは、渡来人とはどのように考えるべきか、広島県において、どういうものが渡来系の遺物であるのかということを知りやすくお話していただきました。弥生時代から飛鳥時代、奈良時代と非常に長い間の話をしていただいたので、時間が少々足りなかったようですけれども、理解する上で非常にわかりやすくお話していただきました。

次いで、亀田さんには朝鮮半島での文物、それから、吉備を中心に日本に渡来した文物ということでお話していただきました。私が興味深く感じたのは、渡来系遺物とそれをもたらした人間、すなわち渡来人です。その渡来人についても、どういうふうな生活用具が遺跡から出てくると、渡来人が暮らしていたと判断できるかというところまでお話していただきましたので、皆さんも非常に参考になったのではないかと思います。亀田さんの研究室をお伺いすると、本当によくぞお集めになった…というぐらいの韓国や中国の文献が所狭しと置かれていまして、もし何か、古代の東アジアの大陸からの渡来文化を知ろうと思えば、亀田さんの研究室に伺えばいいなということ。ただし、岡山理科大学という所は、ちょっとした高台にありますので、エスカレーターで大学まで行かなきゃいけない（笑）という所なのです。でも一度ぐらい行ってみ



シンポジウム風景

られたらどうかと思います。

そして松下さんには、渡来系の遺物、それから渡来人、それが文献資料とあわせて、どういうふうなことが具体的に言えるのかということをお話いただきました。特に広島県の古代寺院・寺町廃寺と『日本霊異記』（822年）に出てくる三谷寺の関係を、松下さんのお人柄でしょうか、瓦がこれでもかこれでもかと、微に入り細に入り出てきて、考古学というのはモノで勝負なのですけれども、非常に丁寧にモノを見て、その成果をお話いただきました。非常に小さな傷のようなものとか、ぷくっと膨れた小さい模様がどうしたとか、そういった大変細かなところから歴史を紐解いていくのだという、考古学の真髄も同時に教えていただいたような気がいたします。松下さんの今日のお話では、もう議論の余地もないくらいに、皆さんご堪能いただいたのではないかと思いますけれども、それでも言い残したことがあるかとも思いますので、これからお三方に、そのあたりからお話していただきます。そして、たくさんの方から質問が参っておりますけれども、時間の関係で取り上げることができるか少々心許ないところですが、今日の講演会とシンポジウムは一般の方が中心ですので、できるだけご質問の趣旨に添った形で議論を進めて参りたいと思います。時間は、ご発表のみなさんも裏方の方も大変気にしておられますので、予定どおりに3時50分までとさせていただきます、4時には閉会となるようにやっていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

それでは言い残したことや、これはぜひともつけ加えたいということがございましたら、伊藤さんから手短かにどうぞ。

伊藤 補足することは特にございませんけれども、今回、弥生時代から白村江の戦い後の奈良時代ぐらいまでの広島県の渡来系の遺物から、渡来人が来た痕跡や可能性のある出土品を集めて他地域などと比較してみると、



伊藤実さん

やはり渡来人が集団でやって来た地域というのが、北部九州と河内・大和などの近畿地方にかなり二極分化している実態があらためてわかりました。

それからもう一つ、九州と近畿の中間地帯、今日亀田さんがお話された吉備（岡山県）には、高塚遺跡とか窪木薬師遺跡などには渡来人が、比較的まとまってやって来た痕跡があるのですが、安芸・備後（広島県）の場合は、どうもそれはなさそうな感じでした。むしろ、ぽつん、ぽつんと渡来系の遺物が点的に落ちていったという感じでした。それでも、確実に何らかの渡来系の遺物というのが弥生時代から確認できましたので、渡来人や渡来系遺物が北九州から瀬戸内を通して近畿地方のほうへ流れていくなかで、瀬戸内沿岸の広島県内にも渡来人が立ち寄ったりしたのではないかと推定される痕跡は確認できました。特に、弥生時代の後期には、広島湾岸とその周辺に比較的多く渡来系遺物が確認されています。またそれ以前の弥生時代前期～中期は、少数分散型とでもいえましょうか、渡来の拠点のような地域はほとんど明確にはできませんでした。全体的に渡来人や渡来系遺物の量が僅少という点と関わっていると思います。



三重1号遺跡のL字状カマドのある住居跡（SB23）

古瀬 例えば、伊藤さん発表のスライドにありました古墳時代中期の三重（さんしげ）1号遺跡（三次市）では、オンドル状遺構（L字状カマド）が見つかった

と紹介されましたが、こういうふうな遺構からは、渡来人そのものが生活していたと理解していいのでしょうか。広島県だと、たまには渡来人がやって来ることはあっても、通常は直接ではなくて、物や文化だけが移動してきたようにも思えるけれども、三重1号遺跡のオンドル状



L字状カマドの拡大写真

遺構から、朝鮮半島では今でも使っているようにオンドルを使う人たちが、県北の方で一時期にしても暮らしていたというふうに見てもよろしいのでしょうか。

伊藤 私の資料の4頁の左上に「33 三重1号」として掲載しています。遺跡の名前は、三重県の三重と書いて「さんしげ」と読みますけれども、この遺跡で見たかったオンドル状遺構（L字状カマド）は、カマドの煙の熱を煙道から室内へ放出できるように工夫したものです。この集落には、古墳時代中期の竪穴住居跡が幾つかあるのですけれども、オンドル状遺構が見つかったのはこの住居跡だけです。ですから集落のなかでこの住居だけ渡来人が住んでいたと考えるのは難しいと思いますし、この住居跡は方形の2本柱の竪穴住居で、L字型カマドがある以外は他の住居跡と構造的に変わりがありません。また、この住居跡から出てきた土器などは通常のこの地域から出土するものと同じです。では、このオンドル状遺構の存在をどう考えるかですが、この住居に住んだ人は、どこかで渡来人と接点があり、そこでカマドをこういう風に工夫したら冬は暖かいのだということを教えてもらったのではないかと想像しています。しかし、三次といえども、韓国の冬ほど寒くなかったのかもしれない。本当に寒くてオンドル状遺構がかなりの効果があったとしたら、集落の全部の住居にもっと普及したかもしれないと思っています。つまり、どこかで渡来人と出会った人が住んでいたかもしれないとは想像できるけれど、この住居を即渡来人の住居と断定する根拠は乏しいというのが、私の見方です。

古瀬 渡来系の人たちが古墳、特に横穴式石室を造ると、特徴的なドーム型の天井部をもつ石室を造ることが滋賀県などではよく指摘されています。広島県の場合は、そういう古墳はあまり注意されていませんが、そこらあたりはどうですか。

伊藤 広島県内の横穴式石室の朝鮮半島との関係は、今回は調べてないのですが、そこらあたりは亀田さんが少しお詳しいのではないかと思いますけど。

古瀬 では亀田さん、言い残した部分がありましたら、それを言っていただいた後に、今のようなお話もお話しいただければと思います。

亀田 僕の言い残したことは、別にございませ
せん。横穴式石室に関しましては、広島の方
で、朝鮮半島とつながる事例というのは今の
ところ知りません。ただ、これに関連して、一
つ質問ですが、竪穴系横口式石室というのが
広島にはありませんでしょうか？。竪穴系横
口式石室で、側壁や閉塞石などが割り石で積
んで構築してある石室がどこかありませんで
したでしょうか。

古瀬 それは、広島市の市街地からちょっと
北に入った安佐南区山本というところに、空
長（そらなが）古墳群というのがありまして、
石室は一見箱形石棺のように見えるのですが、
これが竪穴系の横口式石室というか、それを
やや変形したものではないかと言われていま
す。確証はないのですが、そういう
ちょっと変わった石室があります。

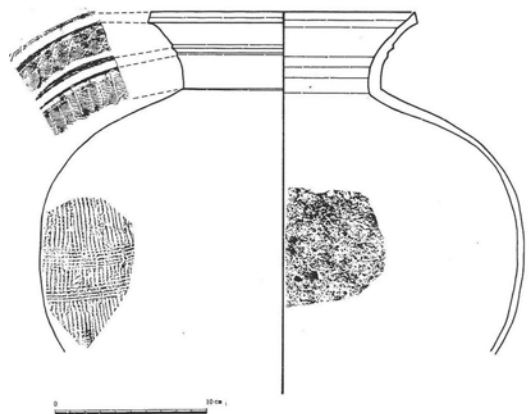
亀田 その時期を教えてくださいと思いま
す。伊藤さんの資料2頁の一覧表（第3図
表・本書の10頁下半に掲載）の15番目に古墳
時代中期として空長古墳群というのがありま
すね。この古墳の細かな時期がわかりますで
しょうか？。中期のいつぐらいのものでしょ
うか、中期の後半ごろでしょうか。須恵器は
出土していますか。



亀田修一さん

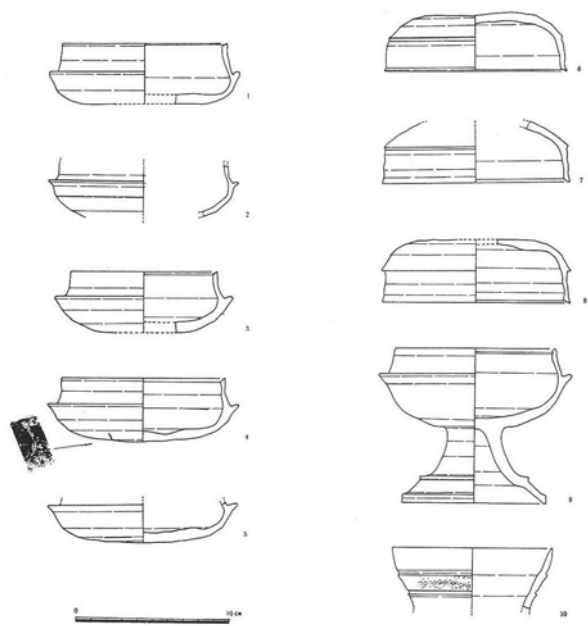


広島市・空長第1号古墳の竪穴系横口式石室
（広島市教育委員会『空長古墳群発掘調査報告書』1978より）



空長古墳群の出土須恵器（TK208型式）
（広島市教育委員会『空長古墳群発掘調査報告書』1978より）

伊藤 空長古墳群からは須恵器がわりとまとまって出土しております。この須恵器の年代については、これは少し専門的で一般の皆様にはわかりにくいのですが、大阪府堺市に陶邑という須恵器の一大生産地の体系的な編年でいうと5世紀中ごろ、すなわち古墳時代中期中ごろのTK208型式と呼ばれる須恵器です。



空長古墳群の出土須恵器（TK208型式）
（広島市教育委員会『空長古墳群発掘調査報告書』1978より）

亀田 古いですね。空長古墳群からは鉄鎚（てつかすがい）が出土していますね。

恐らく、広島では一番古い鎚の出土例だと思います。そうしますと、先ほどの古瀬さんのお話のように、竪穴系横口式で、入り口のところをやや小型の石材を積んで塞いでいる場合は、基本的に朝鮮半島の伽耶に多い形です。九州にも竪穴系横口式石室は多いのですが、この場合は、板石で入り口を塞いでいるものがほとんどです。ですから、区別ができて、空長古墳群のような伽耶系の石室で、鎚が使用されている点から、伽耶系の渡来人が来ている可能性は出てくるのかなと思います。つまり、空長古墳群の石室構造、それから石室の入り口の塞ぎ方、鎚を使うということで、5世紀中ごろの広島の空長古墳群は、早い段階の渡来系の人々の痕跡と考えることもできるかもしれません。

古瀬 有難うございました。渡来人がやって来たかどうかというのは、実際に住居に住んで、向こうで使っていた生活用品を使っている。そういう居住の痕跡があるかどうかと、それからお墓ですね、墓制は、そう急には変えられない風習でして、朝鮮半島から人々がやって来ても、墓の作り方をすぐ日本式には変換できない。向こうのやり方が残る。そういったお話をしていただきまして、この空長古墳群というのは、広島市安佐南区の山本という所にあったのですが、今の亀田さんのお話では、これが渡

来系の人達のお墓である可能性もあるのではないかと思います。そうすると、伊藤さんが報告されましたように5世紀代に広島湾岸周辺には渡来系の遺物が前代に比べて飛躍的に増えてくるという状況と合わせて考えると、広島湾岸にも渡来人が来ていた可能性があるというふうにつながってくるのですね。

亀田 それからもう一つ教えてください。三次の三重1号遺跡なのですが、時期はいつぐらいで、出てきている物はどういう物なのでしょうか。

伊藤 三重1号遺跡の出土品は、土器がほとんどですが、これらは古墳時代中期の5世紀後半ぐらいが中心だったかなと思います。

亀田 オンドル状遺構に関しましては、私は20年ぐらい前からこれを手がかりに渡来人探しをやっておりますけれども、先ほど伊藤さんがお話になられたように、オンドル状遺構は日本では極めて珍しいものです。カマドに関しましては、5世紀前半ぐらいに入ってきて、5世紀の中ごろから後半にかけて日本で普及しはじめ、だんだんカマドを使う日本人も増えてきます。しかし、同じころに伝わったオンドル状遺構は、カマドと違って日本人はどうも受け入れていないようです。それは先ほど伊藤さんがお話しされたように、日本に来たら朝鮮半島より暖かかったので、別にオンドル状遺構というのはなくてもいいや、ということもあったかと思います。しかし三重1号遺跡でオンドル状遺構が出てきています。僕個人としては渡来人が居住した可能性があると思っています。または、先ほど伊藤さんがおっしゃったように、そういう渡来系の人たちの生活風習に関して、かなり近しさを感じているような人が渡来人から情報を得て造った可能性も高いと思います。と言いますのは、逆に、もしこれが土着の三次の人たちの住居ならば、このオンドル状遺構の知識をどういう形で三次の人が知ったのかという点が気になります。日本にはその伝統がなく、実際もほとんど不要なオンドル状遺構を、なぜ三次の人が造ったのかということを想像しますと、そこに何らかの渡来人との関わりを考えざるを得ないのではないかと思います。

それからもう一つ、伊藤さんの資料の4頁の地図を見ていただくと三重1号遺跡の

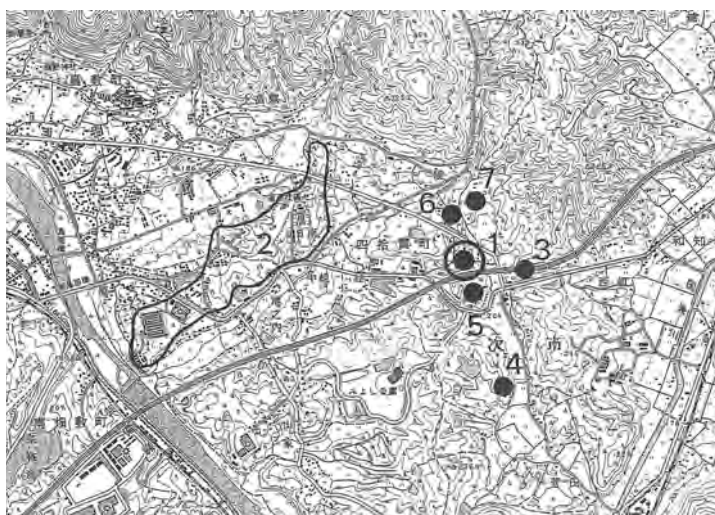
すぐ近くに四拾貫小原（しじゅっかんおばら）1号（古墳）（四拾貫古墳群）がありますが、この古墳から出土した須恵器もかなり変わっています。この三重1号と四拾貫小原（四拾貫古墳群）は実際にどれくらい離れているのでしょうか。今、古瀬さんがおっしゃったように、この地域の渡来人のことを考える場合に、この地域で何をしていただろうかと考えることにしています。まさに日常生活に関わるお話です。つまり、仕事としては少し特殊な鍛冶などを生業としてやっていたとしますと、渡来人たちはそれぞれが勝手にやっていたのか、それともどこかの豪族の下で働かされていたのか、いろいろな想像ができます。岡山の場合は、5世紀ごろには造山古墳の被葬

者がそうした技術を持った渡来人を統括していたと考えています。また渡来人の集落として有名な奈良県の南郷遺跡群というところでは、これも鍛冶を大規模にやっているのですが、そこでガラス玉なども造っていたりしています。この遺跡は葛城

（かつらぎ）氏という大王家に匹敵する大豪族が抱え込んだ渡

来人集落だと考えられています。

こうした岡山や奈良などの豪族に統括された渡来人の集落といえますのは、だいたい5キロ四方ぐらいに集中していますので、こうした観点で、広島の場合を考えてみますと、この四拾貫小



三重1号遺跡と四拾貫古墳群の位置関係
(約1:50,000)

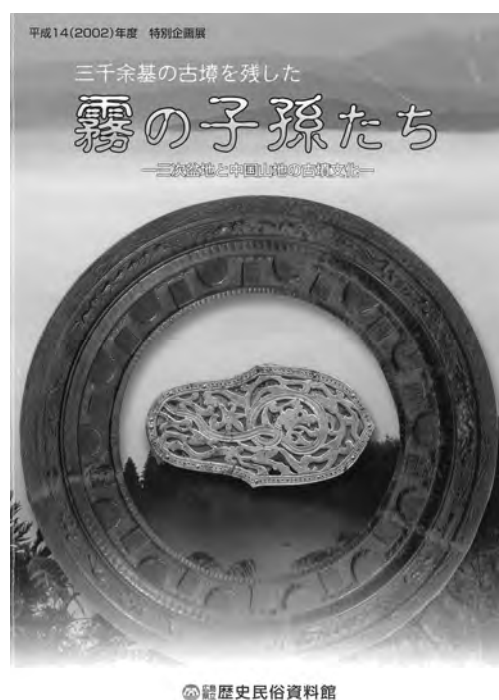
- | | | |
|-----------|----------|-----------|
| 1 三重第1号古墳 | 2 四拾貫古墳群 | 3 上四拾貫古墳群 |
| 4 権現古墳群 | 5 和知白鳥遺跡 | 6 段遺跡 |
| 7 風呂谷遺跡 | | |



三重1号遺跡と上四拾貫古墳群の位置関係

原や三重1号が距離的にそう遠くないのであれば、やはり将来的にこの地域に集中的に渡来人に関わる集落や古墳が出てくる可能性もあるのではないかと思います。本当に渡来人が集中的に居住した痕跡が出てくるかどうかはわかりませんが、そういう可能性を想定して、今後調査を進めると何か出てきそうな気がします。

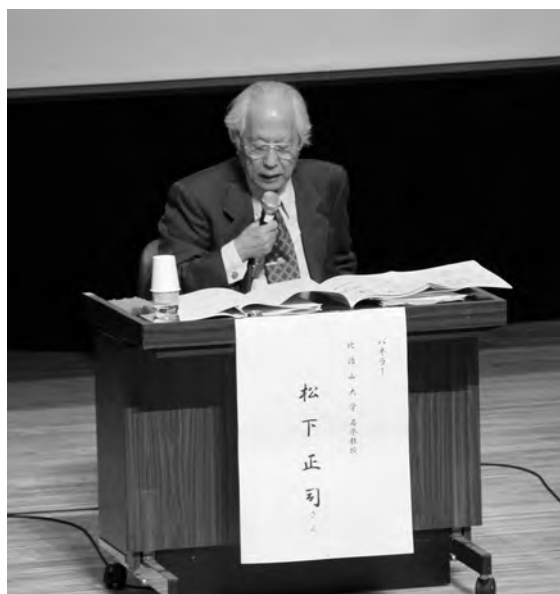
古瀬 そのあたりのことを含めて、伊藤さんは、今広島市内に住んでいるそうですが、三次の広島県立歴史民俗資料館に長く勤務されていらしたので、これは10年前ぐらいですか、平成14年度の資料館の特別企画展『三千余基の古墳を残した霧の子孫たち』というしゃれたテーマで、三次盆地と中国山地の古墳文化の展覧会を企画されました。そのなかで伊藤さんは、まさに今お話にあった5世紀ごろの三次盆地の古墳文化を取り上げました。三次は広島県内でも一番、古墳が飛躍的に増えていく全国的にも珍しい地域なのですね。そしてその古墳というのが、あまり大きい古墳ではなく、小さい古墳がわあーと増えていくのが特徴ですね。その理由として、その頃のことが『日本書紀』にも出てくるように、ちょうど雄略天皇などが朝鮮半島へ軍事力を持って介入するという時代背景がある。そうした朝鮮半島へ送り込まれる倭国の軍団の一員に、まさにのちの三谷郡の大領の先祖なども含まれていたと想像されるのですが、倭国が軍団を形成して朝鮮半島へ軍事力を行使するときの兵隊さんを三次盆地など各地から供給していたのであろうというふうに考えて、その見返りに古墳を造る財力や格式をもらったからこそ、三次盆地など山間地にたくさんの古墳ができたと考えています。さらに伊藤さんは、先ほどもお話がありましたように、墓（古墳）でありながらお棺を埋めてない古墳が幾つかあるのだ、それはその頃、朝鮮半島に行って亡くなって帰って来



図録『霧の子孫たち』
(広島県立歴史民俗資料館 2002)

られなかった人を、故郷の人々が偲んで魂のよりどころとして造られたという風に想定されています。これについては、私にはちょっと異論があるのですが、そういう風なことを含めて、三次の古墳と渡来系の遺物がどのように関わり展開していくのかというのを非常にうまくまとめられています。この後の展開は、今からお話を伺う松下先生のお話された寺町廃寺と関わるのですが、『日本霊異記』の物語と絡めて三次盆地の古代史の大きなクライマックスになってくるのですが、その前段の、古墳時代のお話は伊藤さんのお考えが、この図録の中にしっかり書かれています。これはずいぶん以前の図録ですので、今は図書館とかでしかご覧になれないかとは思いますが、興味のある方はぜひご覧になられたらと思います。それでは、本日の中心テーマであります寺町廃寺について、松下さんにご講演の補足説明も含めて伺いたいと思います。

松下 講演ではだいぶ時間が超過しましたので、実は、まだ3分の1ぐらいしか話ができませんでした。寺町廃寺の軒丸瓦は百済系のものだと以前から私は言っておりましたが、私が研究を始めましたころは、まだ余り百済の瓦について研究が行われていない時代で、簡単に百済系だと申しておりましたけれど、それが曲解されて、百済の瓦が直接、三次へ来ているのだというふうにとらえた方もあったわけです。私はそこまでは言っておらず、百済系の瓦で間違いはありませんが、それが百済で焼かれて持って来られたものでは当然ないわけですし、戦に敗れて倭国に帰る船に重たい瓦は言うまでもなく、その範型などであっても船に乗ってくれたとは到底考えられません。瓦の範型や土器やその他の道具類などの渡来系の文物を考える場合に、そのものが実際の渡来品そのものなのか、あるいは日本で模倣したものなのかというのは、大変難しい話ですけど、寺町の瓦が

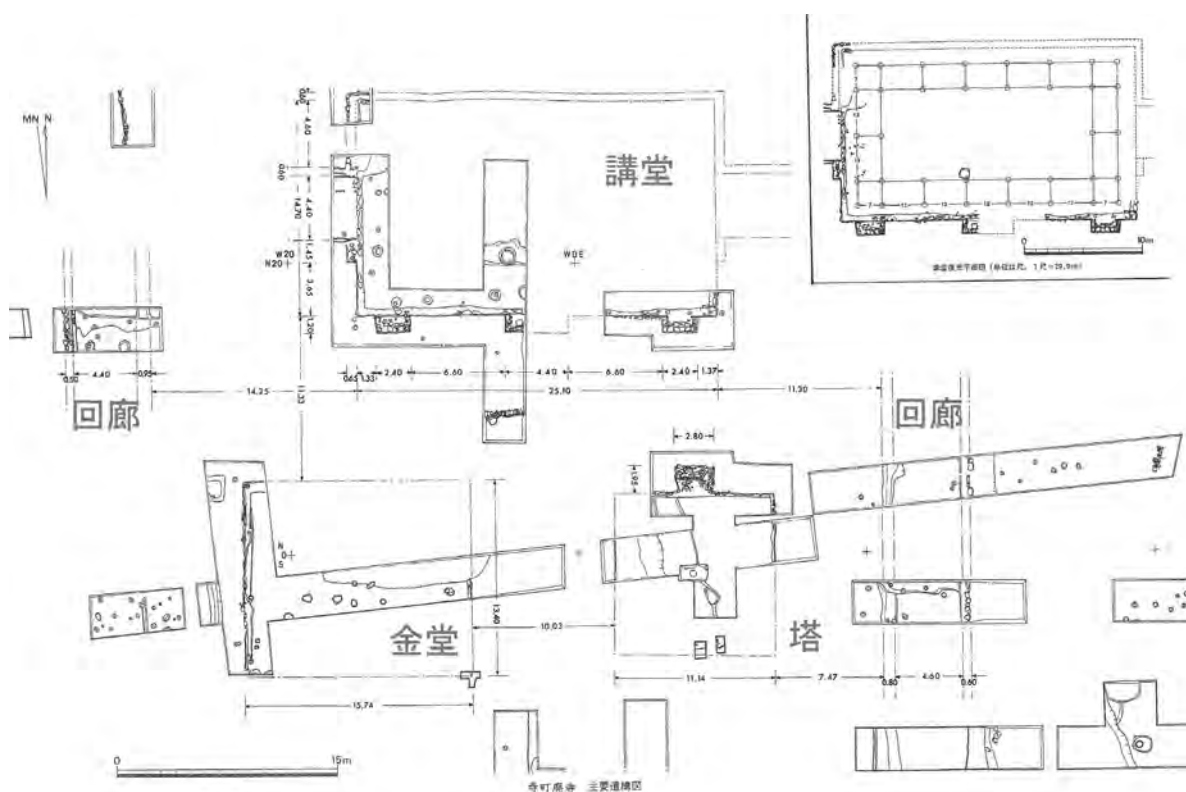


松下正司さん

本当にあれは百済のものだと断言したわけではございません。そこで、備中の栢寺廃寺で、備後の寺町廃寺より古い范型を使った軒丸瓦が出たから、寺町廃寺が『日本霊異記』に出てくる三谷寺であるとする私の推定は、全面的におかしいのだという方が出てきたわけです。しかしこれは大きな間違いだと思っております。『日本霊異記』の物語では弘済禅師が亀に助けられて、備中の浦に上陸したと書いてあるので、備中の栢寺廃寺が三谷寺であっていいんじゃないかと言われる方もおられます。そんなことは、私はあり得ないと思っています。

それからもう一つ、以上のこともひっくるめて、寺町廃寺の瓦は百済系だと言っているのに、寺町廃寺の伽藍配置は、日本の法起寺式じゃないか、という方もおられます。これは日本のどこの古代寺院でも、百済あるいは新羅、高句麗にあるお寺の伽藍配置がそのままコピーされたものはないのです。寺町廃寺は、百済のお坊さんがやってきて、百済様式の瓦を使って、百済のお寺を手本に造ったといっても、百済のどこかにあるお寺がそのまま来たというのはいないですね。私は基本的には、百済から弘済禅師が日本に渡って来て、その弘済が故郷の百済のお寺をイメージして日本風のお寺を造った、それには、渡来系の技術やデザイン、それに渡来人そのものかもしれませんが、非常に大きく関わっているということだと思いのですね。法起寺式の伽藍配置にいたしましても、当時お寺を造るときに、第一に伽藍配置、設計をどうするか、どういう建物を建てるかと考えた場合に、やはり日本の在来の寺院建築様式に従って造ったのだと思いますね。弘済一人が全部設計して造るのではありませんから、実際の作業をするのは日本にいた木工職人や瓦工人などが動員されたわけですから。それに関わったのが渡来人であった可能性は高いとは思いますが、寺町廃寺の伽藍配置が法起寺式だからおかしいということはないと思っています。そこで、ちょっと細かな話ですが、私の資料25頁（本書の110頁に掲載、148頁に再掲）を見ていただきたいのですが、これは伽藍の全体測量図（主要遺構図）です。これに中軸線を入れておけばよかったのですが、入っておりません。中軸線というのは、お寺の設計の中心の線で、

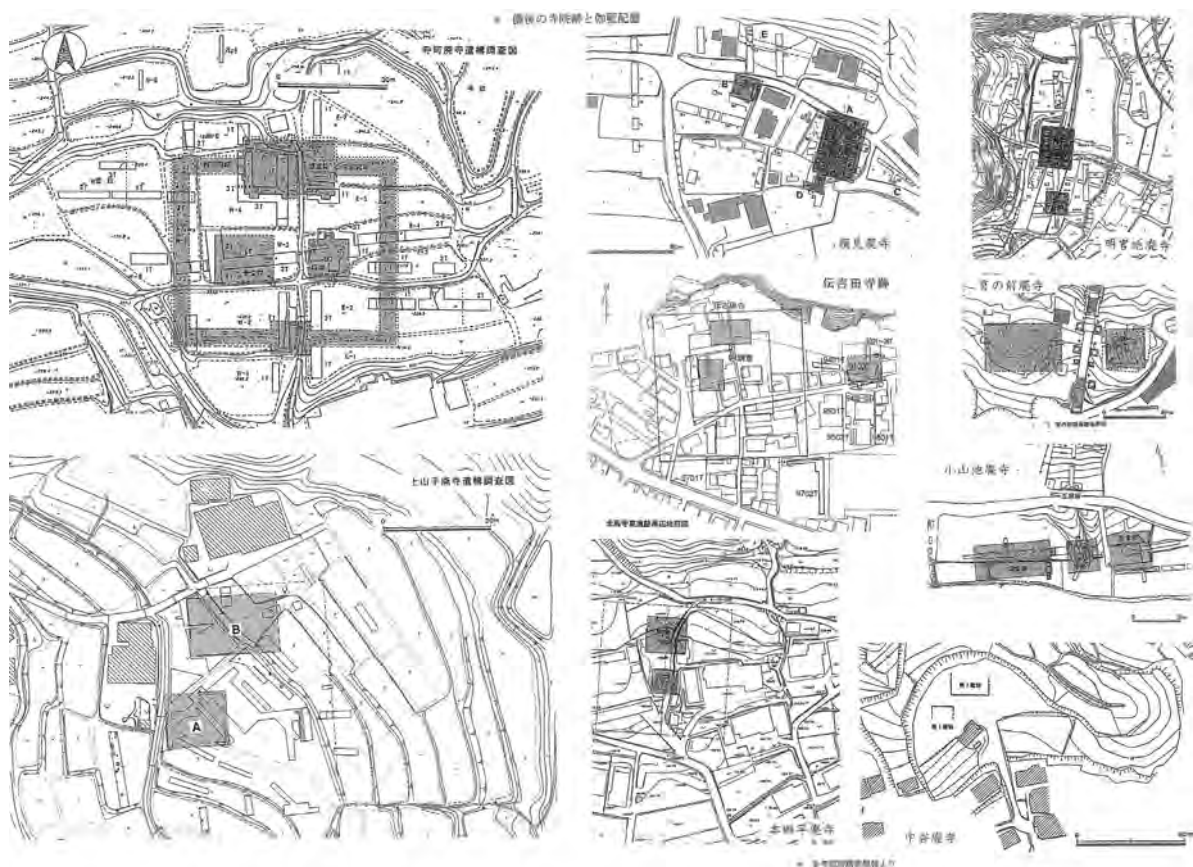
古代のお寺もこれを基点にして造っているのですね。しかし寺町廃寺の中軸線はちょっと複雑でして、簡単に言えば、塔の西辺と金堂の東辺の間のちょうど真ん中を南北に延ばせば中軸線になるのですが、この中軸線は講堂の中央階段の真ん中を通っていますから間違いないと思います。ただ、ここで大変おもしろいのは、この講堂の中心を通る中軸線を基準として、中軸線から東西の回廊までの長さが西側と東側で違うのです。資料25頁（本書110頁、148頁）の図には、各建物や建物間の距離が数字で記入されておりますが、講堂の下の方に書かれている数字をちょっと見ていただくと、数字の2段目のところ、講堂の東西の全体の長さと左右（東西）の回廊までの距離が書かれていますが、右側（東側）の方は11.30と書いてあります。これが講堂の東辺から東回廊の西辺の間の距離が11.30mであるということなのです。逆に講堂の左側（西側）は、講堂の西辺から西回廊の東辺までの距離は14.25mで、3mほど左側（西側）



配付資料25頁 「寺町廃寺 主要遺構図」

が広く造られている。つまり、中軸線から考えると、寺域の西側がやや広く設計されていて回廊が1間分多いわけです。こうした例は、実は法隆寺にもあります。法隆寺は東側が長くなっています。これは何が原因かという、私はこの伽藍配置を設計したときに、塔と金堂の位置に合わせて周囲の回廊の位置を大体計算していたのだと思うのです。ですから、金堂の西辺から西回廊の東辺と、塔の東辺から東回廊の西辺のそれぞれの間隔（距離）が、大きく違わないように調整して回廊の位置を決めたのではないかと考えているのです。一方、もしかしたら中軸線が違うのではないかということも考えました。それは、塔の中軸線を北に延ばしますと、ちょうど講堂の東の階段の東辺にあたりますが、一方、金堂の中軸線を北に延ばすと、ちょうど講堂基壇の西辺にあたります。塔と金堂は講堂に比べると全体的に西に寄っているのです。そこで塔と金堂、それぞれの中軸線を基準にしてこれを二等分した線の中軸線とすると、中軸線がやや西に寄ってきて、この中軸線から西側の回廊と東側の回廊までの距離は、ほぼ同じ距離になるのです。このことは今後さらに議論していかなければならないと思っています。

それからもう一つは、私の資料24頁（本書の107頁に掲載、150頁に再掲）を見ていただきますと、左上に寺町廃寺の伽藍配置図を載せております。そしてその下に、説明できませんでしたが上山手廃寺の伽藍配置図を載せています。上山手廃寺の場合は、実は塔がまだ見つかっていないのですが、Aと書いてあるのが金堂、Bと書いてあるのが講堂です。この二つのお寺の伽藍配置図をお帰りになって、重ねていただきますと、ほぼぴったり合致することがわかります。つまり、明らかに寺町廃寺の伽藍配置を基に上山手廃寺が造られていて、寺町廃寺を造った設計図を基に上山手廃寺が建立されたことが明らかだということです。ただ上山手廃寺の場合は塔が検出されていません。講堂があるのに塔がないというのは、考えにくいのですが、本当になかったとすれば、非常に特異な伽藍配置になりますけれども、こういうおもしろい類似点があることを説明しておりませんでしたので、ご紹介しておきます。



配付資料24頁 「備後の主要寺院の伽藍配置図」

古瀬 有難うございました。寺町廃寺というのが備北地域では一番整った伽藍配置をもっていて、また一番古い瓦が出ているという、こうしたことを基準にして三谷寺だと考えたということですが、亀田さん、寺町廃寺が白村江の戦い（663年）から少し経って造られたとすれば、松下さんのお考えの寺町廃寺の瓦の変遷過程のなかで一番古い物というのは、朝鮮半島とか吉備、その他の地域を見渡したときに、663年より古くなる可能性というのはあるのでしょうか、ないのでしょうか。私は古代瓦が不勉強なので、一応、確認だけさせていただきたいのですが。

亀田 寺町廃寺とか栢寺廃寺などが、663年より古く建立されたということですか。

古瀬 そうですね。663年より古くなる可能性というの、ないのでしょうか。

亀田 瓦だけのお話でしたら「可能性」はあります。実は、百済で西暦527年に建てられた大通寺というお寺の跡が、熊の津と書いてウンジン（熊津）という現在の公州

(コンジュ) 市内にございます。熊津時代の百済で中国の南朝の梁との関係で造られたお寺さんで、梁の年号(「大通」)を使って大通寺としたと考えられています。このお寺の瓦は、現時点で確認できる百済最古の南朝系蓮華文の瓦です。この蓮華文のグループのものには、寺町廃寺の蓮華文と類似したものがあると思います。先ほど、松下さんがおっしゃっておられますように、蓮弁の弁端、つまり蓮の花びらの先端がちょっと盛り上がった感じのものが、寺町廃寺の瓦にありますが、そうした細かな特徴は、基本的に百済の蓮華文の中で伝統的に受け継がれていきます。あまり細かな話をすると解りにくくなりますので、おおざっぱに言いますと、寺町廃寺の蓮弁の形だけを百済のもの比べると、時期的には恐らく7世紀前半ごろのものとするのが可能で、そういう意味では、さかのぼる可能性は当然ございます。

古瀬 寺町廃寺が白村江の戦いの後で建てられたものであると考えるのであれば、百済系瓦のそのあたりの説明をもう少しお願いできると、一般の方も非常に理解しやすいという所もあろうかと思うのですが、松下さん、そのあたりについてはいかがですか。

松下 寺町廃寺の建立年代の微妙な問題は、議論するのが大変難しいのですが、もし、寺町廃寺の建立が白村江の戦い以前だとすると、お寺の建立契機やお寺を建てたスポンサー(壇越^{だんおつ})はだれか、という問題も白紙から議論する必要がありますね。それを考えてみても、私には無理のような気はしているのですけどね。

古瀬 よくわかりました。日本で最初に造られたお寺は飛鳥寺ですけれども、これは百済の協力で西暦588年に建て始めて、実際に20年ぐらいかけて完成するのですけれども、これが日本で最初の瓦葺きのお寺とされています。私は飛鳥寺の瓦と比較して寺町廃寺の最古式の瓦の年代的な位置づけがどうしても気がかりで、関係の先生にくどいほどお聞きしてしまいました。寺町廃寺が三谷寺である蓋然性の高いことは私も含めて衆人が認めるところですが、寺町廃寺の建立の背景や経緯などについて、松下さんにさらに詳しいご研究を推進していただければと思っています。

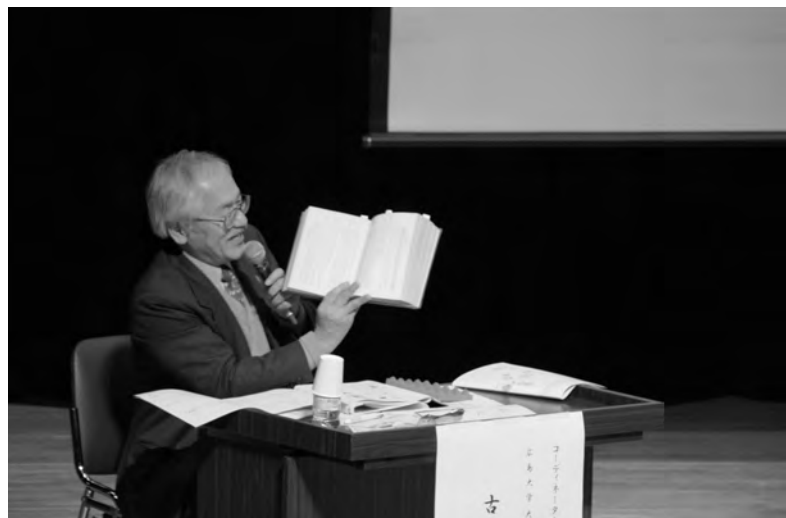
そう言っている間に時間が来てしまいまして、いろいろ質問も来ているのですが、

これについては、もう少し聞きたいということがございましたら、伊藤さんのいらっしゃる県の埋蔵文化財調査室、それから、岡山理科大の亀田さんの所へ直接、エスカレーターに乗って行っていただくということにさせていただきたいと思います。それから今日は、白村江の戦いについて非常に細かな戦況報告のようなものを亀田さんからしていただいたのですが、今日は私も宝物を持って来ましたので、最後にこれを紹介して終わらせていただきたいと思います。

この本は、『三国史記』という朝鮮半島の百済・新羅・高句麗の三国の正式の歴史を書いた本で、日本の『日本書紀』、中国の三国時代の『三国志』などに並ぶ朝鮮半島最古の歴史書です。そしてこれは昭和3年に日本で出版されたものですが、この書籍の一番後に、東京帝国大学文学部東洋史学科松崎寿和と署名してあります。この方は、私のお師匠さんなのですが、中に赤ペンでいっぱい書き込みがありまして、ものすごく勉強していることがわかります。大学では、「今日は風が吹いているから授業はなし…」とか言っておられた先生が、学生時代はすごく勉強しておられたのだということがよくわかる本です。この黄色い付箋は私が付けたのですが、実は、邪馬台国の時代、卑弥呼が活躍していた頃に朝鮮半島の人たちが、倭国や倭人、卑弥呼とかをどのように見ていたかというのがよくわかるのです。そういった言葉が頻繁に出きます。それで、この本に書かれている内容から、百済や新羅の人たちから見て白村江の戦いをどのようにとらえていたかというのを、ちょっと紹介します。

こういうふうになります。

「熊津より白江に行く、以って陸軍に会い、周留城に走る。倭人と白江口に遭い…」、倭人というのは日本人ですね。



『三国史記』を説明する古瀬清秀さん

(原文) 三國史記 卷第二十八 百濟本紀第六 義慈王

二年七月・・(中略)・・自熊津江往白江 以會陸軍 同趨周留城 遇倭人白
江口 四戰皆克 焚其舟四百艘 煙炎灼天 海水爲丹・・ (以下略)

白村江という言葉は出てこず、白い江と書いて白江と出てきます。そして「白江口で倭人に遭い、四戦皆克」、つまり倭人と四度戦ってみな勝った。これは新羅側の立場で見ている記述ですね。続けて「其の舟四百艘を焚く、煙炎天灼し、海水丹と爲す」(その船四百隻を焼く、煙と炎が天を焦がし、海の水は赤くなった)、という風に非常に客観的かつ写実的な記述がしてあります。これが、亀田さんが説明してくれた白村江の戦いの朝鮮側の最も古い記録です。今日は、最後にこれをちょっと紹介したかったので、恩師の学生時代の古い本を持って参りました。

時間が過ぎてしまいましたので、会場の皆様からの質問にお答えする時間がなくて申し訳ない限りですが、今日はお三方に本当に熱弁を振っていただきましたので、要点はご理解いただけたのではないかと思います。

これからまた埋蔵文化財調査室は、来年度のこの日に向けて、1年間頑張っていくだろうと思いますので、ますます頑張れるよう、皆さんの応援をお願いしたいと思います。

ちょっと中途半端な形になってしまいましたけれども、今日の「古代の東アジアとひろしま」をテーマにしたお三方のお話については、ご堪能いただけたのではないかと思いますので、本日はこれで終わりにさせていただきたいと思います。

長時間本当にありがとうございました。(拍手)



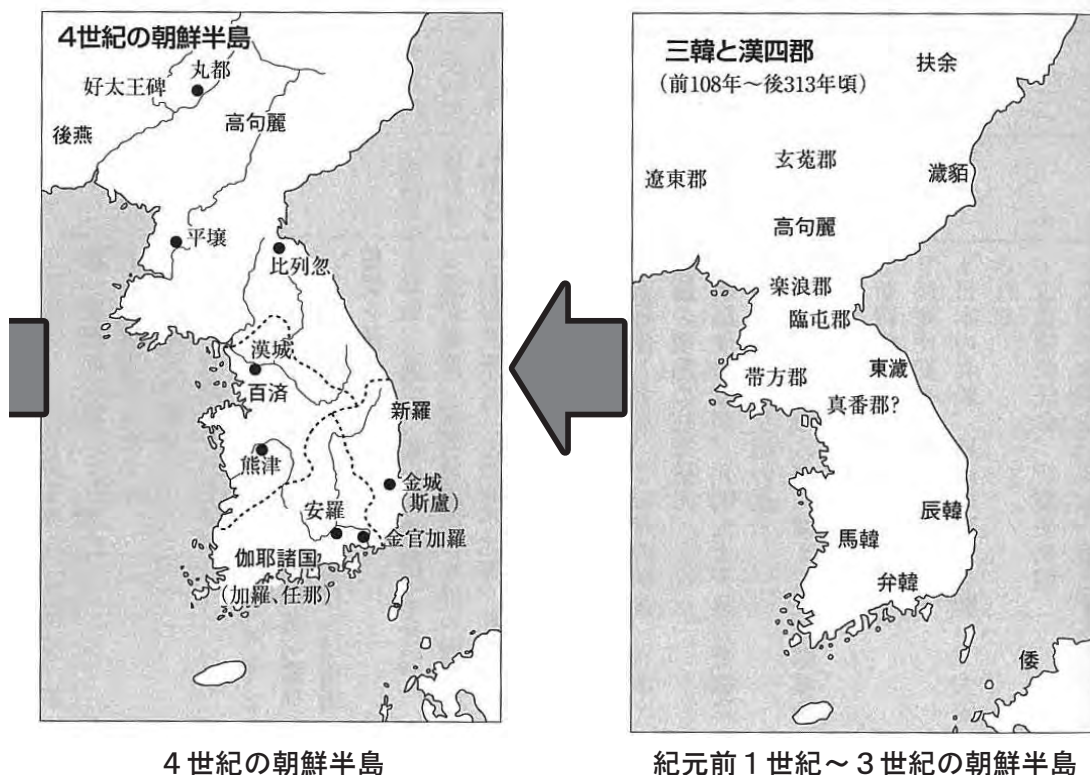
白村江の戦い（663年）時の朝鮮半島



6世紀前半の朝鮮半島

六〇一	六〇二	六〇五	六一〇	六一三	六一五	六一八	六二二	六三三	六三一	六四〇	六四三	六四六	六四七	六五一	六六〇	六六二	六六三
9	10	13	18	21	23	26	31	31	3	12	皇極元	大化2	3	2	白雉2	天智元	2
3月	11月	4月	3月	7月	7月	8月	7月	3月	10月	4月	9月	9月	9月	9月	7月	5月	8月
日本，高句麗・百済へ使いを送る	日本，新羅への攻略を計画（六〇三年に計画中止）	高句麗，造仏用の黄金を日本にもたらす	高句麗僧・曇徴，彩色・紙・墨・碾磑（水力で動かす石臼）の製法を日本に伝える	百済人・摩之，伎楽舞を日本に伝える	百済使，遣唐使犬上御田鍬に従って来朝	高句麗，方物を進め，隋の滅亡を伝える	新羅，任那を討つ。日本，任那に派兵	百済王子・豊璋，質として日本に来朝	南淵請安，高向玄理ら唐より帰国。	百済使・新羅使，随伴して来朝	内乱で追放された百済王族ら来日	任那の調の貢進を廃止	新羅王子・金春秋，質として来朝	新羅使，筑紫に来るが，唐服着用を責めて追い返す	百済，新羅・唐の攻撃により滅亡	余豊璋らを百済に送り，王位を継がせる	日本・百済軍，新羅・唐軍と白村江に戦い大敗【白村江の戦い】
9月																	9月
日本軍，百済遺民と帰国																	日本軍，百済遺民と帰国

図と年表は、新人物往来社『歴史読本（第五十一巻三号）特集古代日朝関係史』（2006年2月号）掲載のものを引用しました。



西暦	和暦	事項
四六四	雄略8	新羅王が任那王に使いを出し、高句麗に対抗するため日本府の援軍を求める
五一二	継体6	百濟、任那の四県を勢力下に収める
五一三	7	百濟、五経博士段楊爾を倭に送る
五二七	23	筑紫国造磐井、新羅と通じて反乱
五二九	21	倭軍、安羅で百濟・新羅の任那進出を阻止しようとしたが失敗
五三八	宣化3	百濟の聖明王、倭に仏像と経論を送る
五四一	欽明2	百濟、伽羅諸国の王と任那復興を協議
五四八	9	倭、百濟に兵を送り築城を助ける
五五四	15	百濟、五経・易・暦・医博士、および僧らを派遣
五六二	23	倭・百濟両軍、新羅と戦う。百濟の聖明王戦死
五七五	4	新羅、大伽羅を滅ぼし任那併合
五八三	12	新羅、任那四邑の調（任那の調）を進める
五八八	崇峻元	任那復興のため、火葦北国造の子・日羅を百濟から召還
五九一	4	百濟、仏舎利・僧・造寺工などを送る
五九五	推古3	善信尼ら百濟に留学
六〇〇	8	倭、任那復興のため、軍二万を筑紫に派遣 5月 高句麗僧・恵慈、百濟僧・恵聡氏ら倭に派遣 2月 新羅、任那を攻める。倭、兵万余を送り、任那を救う

古代日朝交渉年表（瀧音能之編）

閉会あいさつ

財団法人広島県教育事業団
埋蔵文化財調査室長

伊藤 実

時間になりましたので、手短に閉会のごあいさつをさせていただきます。埋蔵文化財調査室の伊藤でございます。

今日は、大変お忙しい中、基調講演の講師、並びにシンポジウムのパネラーを務めていただきました松下正司先生、亀田修一先生、それからシンポジウムのコーディネーターを務めていただきまして、最後に恩師の形見の秘蔵の品をご紹介いただきました古瀬清秀先生の三人の先生方には、本日の開催に至る準備の段階からいろいろと指導をいただきまして、まことにありがとうございました。

このような盛大な会になりましたことを関係者一同、心から感謝しております。

今回は、広島の遺跡を東アジアの視点から眺めてみることにいたしました。その素材として、全国的に有数の遺跡でありながら、これまであまり取り上げられることのなかった三次市の寺町廃寺という古代寺院を取り上げました。

寺町廃寺は、今日お話いただいたように、県内はもとより中国地方、さらには全国的にも有数の古代寺院跡です。この貴重な寺跡の調査研究をさらに進めていくことも大事な仕事ですが、松下先生も基調講演のなかで言うておられましたけれども、こうした貴重な遺跡の価値が多くの人にわかるように遺跡を保存整備し公開を進めていくことも、これからはぜひとも必要なことではなかろうかと思っております。

私どもの教育事業団埋蔵文化財調査室では、身近な発掘調査の成果だけではなく、こうした県内の有数の遺跡を新しい視点で見つめ直し、その価値を広くお知らせする仕事も私たちの使命だと思っております。

これからも歴史や考古学の情報を皆様方にわかりやすく広めていくというような努力を継続して参りたいと思っておりますので、今後とも御支援、御協力をいただきますようお願いいたします。

最後になりましたけれども、本日、早朝より長時間にわたりまして、御清聴いただきました会場の皆様に対しまして、心から御礼申し上げまして、閉会のごあいさつにかえさせていただきます。どうもありがとうございました。

平成24年 1 月 21 日

総括（総合調整）	伊藤 実（室長）・向田裕始（主任専門員）
指導（企画指導）	松下正司（指導委員）
全体運営（企画・運営）	青山 透（事業調整監）・向田裕始（主任専門員）
研究発表	伊藤 実（室長）
進行（司会・進行監理）	沢元保夫（主任調査研究員）・曾根 猛（主任調査研究員） 川崎真二（調査研究員）
会場運営（誘導・アンケート）	梅本健治（主任調査研究員）・河村靖宏（調査研究員）
記録・映像（録音・映写・写真）	辻 満久（調査研究員）・河村靖宏（調査研究員）
展示（展示準備・展示・説明）	山田繁樹（調査研究員）・山澤直樹（調査研究員）
講師対応（誘導・接待）	中川千奈美（主任）
受付（受付・資料配付）	尾崎光伸（調査研究員）・中川千奈美（主任）・木原誓子（職員）



①開会前の受付



②開会前の会場と映像係



③開会挨拶の理事長



④ 関連資料展示



⑤ 関連資料展示



⑥ 関連資料展示



⑦休憩中の司会



⑧発表



⑨講演中の会場

昭和62年（1987）の第1回の開催以来、20年以上にわたって様々な企画で開催を続けてきた『ひろしまの遺跡を語る』は、今回で31回目を迎えました。

企画から準備・実施、そして記録集の作成に至るまで、少人数の埋蔵文化財調査室の職員と指導委員の松下正司さんを中心に、多くの関係者のみなさまのご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。(伊藤実)

これまでの『ひろしまの遺跡を語る』略年譜

昭和62年7月19日	【広島県立社会教育センター】 (記念講演)	『ひろしまの遺跡を語る－最近の発掘調査成果報告－』 『広島県の考古学』潮見浩（広島大学教授）
平成2年2月4日	【広島県立生涯学習センター】	『ひろしまの遺跡を語る－昭和63年度発掘調査の概要－』
平成2年9月1日	【広島県情報プラザ】	『ひろしまの遺跡を語る－平成元年度発掘調査報告会－』
平成3年2月1日	【広島県情報プラザ】	『ひろしまの遺跡を語る－平成2年度発掘調査報告会－』
平成4年10月30日	【三次市文化会館】	『第1回ひろしまの遺跡を語る－平成3年度発掘調査報告会－』
平成5年2月6日	【広島県民文化センター】	『第2回ひろしまの遺跡を語る－平成3年度発掘調査報告会－』
平成5年11月20日	【広島県立歴史博物館】	『第1回ひろしまの遺跡を語る－平成4年度発掘調査報告会－』
平成6年2月5日	【広島県民文化センター】	『第2回ひろしまの遺跡を語る－平成4年度発掘調査報告会－』
平成6年7月23日	【三次市文化会館】	『第1回ひろしまの遺跡を語る－平成5年度発掘調査報告会－』
平成6年9月24日	【広島県民文化センター】	『第2回ひろしまの遺跡を語る－平成5年度発掘調査報告会－』
平成7年8月20日	【広島市南区民文化センター】	『第1回ひろしまの遺跡を語る－平成6年度発掘調査報告会－』
平成7年9月30日	【広島県立歴史博物館】	『第2回ひろしまの遺跡を語る－平成6年度発掘調査報告会－』
平成7年11月11日	【広島県立歴史民俗資料館】	『第3回ひろしまの遺跡を語る－平成6年度発掘調査報告会－』
平成8年10月19日	【三次ロイヤルホテル】	『第1回ひろしまの遺跡を語る－平成7年度発掘調査報告会－』
平成8年11月10日	【広島県民文化センター】	『第2回ひろしまの遺跡を語る－平成7年度発掘調査報告会－』
平成8年11月16日	【広島県立歴史博物館】	『第3回ひろしまの遺跡を語る－平成7年度発掘調査報告会－』
平成9年10月26日	【広島県民文化センター】 (基調講演)	『ひろしまの遺跡を語る－平成8年度発掘調査報告会－』 『人骨が歴史を語る』松下孝幸（土井ヶ浜・人類学ミュージアム館長）
平成10年10月18日	【広島県民文化センター】 (基調講演)	『ひろしまの遺跡を語る－設立20周年記念－』 『考古学からみた邪馬台国時代』石野博信（徳島文理大学教授）
平成11年11月21日	【広島県民文化センター】 (特別講演)	『ひろしまの遺跡を語る』 『現代の科学から歴史が見えてくる』三辻利一（奈良教育大学教授）
平成12年11月19日	【広島県民文化センター】 (特別講演)	『ひろしまの遺跡を語る』 『海のシルクロードと東西文化交流』櫻井清彦（早稲田大学名誉教授）
平成14年2月24日	【広島県民文化センター】 (特別講演)	『ひろしまの遺跡を語る』 『前方後円墳のはなし』近藤義郎（岡山大学名誉教授）
平成14年11月3日	【広島県立生涯学習センター】 (特別講演)	『ひろしまの遺跡を語る』 『宇那木山古墳群の発掘調査からわかったこと』 古瀬清秀（広島大学大学院教授）
平成16年1月17日	【広島県民文化センター】 (特別講演)	『ひろしまの遺跡を語る』 『文化財の保存と活用』河瀬正利（広島大学大学院教授）
平成16年12月26日	【広島県民文化センター】 (講演)	『ひろしまの遺跡を語る』 『戦国時代史研究と遺跡調査』岸田裕之（広島大学大学院文学研究科長）
平成18年1月7日	【アステールプラザ】 (基調講演) (シンポジウム)	『4法人共同企画新春放談 初夢ひろしまの城物語』 『ひろしまの城』三浦正幸（広島大学大学院教授） 『発掘されたひろしまの城を語る』
平成19年1月6日	【アステールプラザ】 (基調講演) (シンポジウム)	『4法人共同企画新春放談 ぶらりひろしま江戸の旅』 『街道筋の暮らしぶりにみる「エコ」生活』石川英輔（作家） 『ひろしまの江戸時代を掘る』
平成20年1月12日	【アステールプラザ】 (基調講演) (シンポジウム)	『4法人共同企画新春放談 飛鳥美人なに想ふ』 『ニューファッションへの道』増田美子（学習院女子大学教授） 『ひろしまの装・飾・美をさぐる』
平成21年1月10日	【広島県立生涯学習センター】 (講演) (シンポジウム)	『平成20年度ひろしまの遺跡を語る』 『最近の発掘調査からみた広島県の古墳』古瀬清秀（広島大学大学院教授） 『ここまでわかった広島古墳時代』
平成22年1月16日	【広島県立総合体育館】 (講演)	『平成21年度ひろしまの遺跡を語る』 『卑弥呼と箸墓古墳』春成秀爾（国立歴史民俗博物館名誉教授）
平成23年1月8日	【広島県民文化センター】 (基調講演) (シンポジウム)	『平成22年度ひろしまの遺跡を語る』 『安芸・備後の古墳と古代国家形成』松木武彦（岡山大学大学院教授） 『古墳時代の暮らしと心』
平成24年1月21日	【広島県民文化センター】 (基調講演Ⅰ) (基調講演Ⅱ) (シンポジウム)	『平成23年度ひろしまの遺跡を語る』 『朝鮮半島、吉備、そして備後の寺々』亀田修一（岡山理科大学教授） 『百済僧弘済の三谷寺をさぐる』松下正司（比治山大学名誉教授） 『古代の東アジアとひろしま－白村江の戦いと寺町廃寺－』

財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室 活動報告 第2集

平成23年度 ひろしまの遺跡を語る

古代の東アジアとひろしまー白村江の戦いと寺町廃寺ー 記録集

発行日 平成24（2012）年12月20日

編集 財団法人 広島県教育事業団事務局 埋蔵文化財調査室

〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号

TEL（082）295-5751 FAX（082）291-3951

発行 財団法人 広島県教育事業団

印刷所 鯉城印刷株式会社